

成人式を迎えたミャンマーとの医学交流

玉野総合医療専門学校・加計学園理事
名誉教授・特命教授（研究）岡田 茂（昭和 39 年卒）

この医学同窓会誌に「親日国ミャンマー（ビルマ）をしていますか？」という拙文を掲載（医学同窓会誌 89 号、平成 12 年（2000 年）10 月 1 日発行）してから約 10 年が経過する。この中では、私がミャンマー（当時はビルマ）を最初に訪れた昭和 63 年末から 64 年＝平成元年（1989 年）のできごと、平成 8 年から文部省科学研究費によるミャンマー保健省医学研究局と共同研究がスタートし、平成 11 年までにサラセミアによる鉄過剰、輸血による C 型肝炎の蔓延が確認され、C 型肝炎対策には JICA の援助が開始されることを述べた。

私が定年退職した平成 17 年（2005 年）には「岡山大学におけるミャンマーとの共同研究」を岡山医学会雑誌（117: 61-75, 2005）に上梓した。それには、ミャンマーの医療事情、ミャンマーにおける輸血業務の改善と JICA 支援（2000 年～2003 年）、岡山大学との大学間協定の締結（2002 年）、慢性肝炎除鉄治療の開始（2003 年）、岡山大学 COE「ミャンマーを拠点としたアジア医学拠点」への発展（2004 年～2005 年）について、岡山大学医歯薬学部を中心とした支援を詳述した。

今年は私達がミャンマーと交流を開始して満 20 年、成人式に当たる年だ。しかし、この間のミャンマー国民の生活水準向上には限度があり、国民は政治情勢に翻弄されてきた。この国の政治体制に不満を抱くアメリカ、英国を始とするヨーロッパ諸国からの経済封鎖は続いており、それに同調する日本からの支援もほとんどない。多くの資源を有し、天然ガスの輸出国であるミャンマーに対しては、その間を縫うように中国の影響力が飛躍的に増大している。1983 年ヤンゴン訪問中の韓国首脳を殺害したテロ事件以降、断絶していた北朝鮮との関係も、中国の仲立ちにより 2006 年 10 月には国交回復した。その後は軍事的な連携を強めているとの報道もみられる。このような情勢に対して、アメリカのオバマ政権は対話路線への転向を示唆し始めている。日本外交の向かう先はまだ判らない。

ミャンマーは親日的であるだけに日本からの交流・支援を待ち望んでいる。現実には交流・支援は非常に制限されているだけに継続すること自体に価値あり、それがミャンマーの人たちに少しでも役立っているとすればこの上ない喜びである。そしてこの交流が可能になっている背景に岡山医学同窓生に縁ある方たちの助けが非常に大きい。その様なことに思いを馳せながら、以下 2005 年以降の医学交流について述べてみたい。

NPO 法人 日本・ミャンマー医療人育成支援協会の設立と僻地医療センター建設

グローバル化対応の医療環境の構築には特定の国だけが抜け落ちていたのではどうにもならない。近代医療に精通し、信頼関係のある人脈の形成は欠かせない。ましてや対象国が発展途上国であれば医療レベル・知識に隔たりがある。この穴埋めには医療人を日本に招聘し、研修を行い、交流を続けることにより長い将来にわたる信頼関係を作り上げるのがよいであろう。そのためには、まだ岡山大学に関係者が多く残っている間に道筋を作っておく必要がある。岡山大学にも多くの大学間協定があるが、パートナーの一方が退職等により連絡が途切れるとその協定は形骸化してしまっている例も多い。それでは何にもならない。私は退職を契機に「日本・ミャンマー医療人育成支援協会」設立の準備を始め、2006 年 3 月に岡山県 NPO の認証を受けた。

顧問には私の新たな勤務先である加計学園の理事長加計孝太郎氏を、肝炎対策の小出典男総合内科学教授を副理事長、ミャンマーに関連ある大学関係者、知人に理事就任をお願いした。監事は森昭胤名誉教授、事務局長には岡山市役所 OB で同級生の佐藤春雄君が引き受けてくださった。ホームページ <http://www.mjcp.or.jp> を立ち上げ、機関紙「ミンガラバー（こんにちは）」を発行している。会員（年会費 6,000 円）、賛助会員（年会費 50,000 円）獲得に努め、2009 年現在約 400 人の会員数にまで成長している。また、岡山県を含め多くの団体、会社からの寄付を仰いでいる。

設立から今日までの研修生は 16 名、本年度は更に 3 名を予定している。国際学会発表の支援もこれまで延べ 6 名に対して行った。研修生は大学間協定に基づく外国人特別研究員として登録され、研修終了証書が授与される。西山照子理事により提供された寮に宿泊し、旅費と生活費は協会より支給される。

ミャンマーには日本留学生の同窓会 MAJA(Myanmar Association of Japan Alumni、会長アウン・チョウ教授)があり、本学からの帰国研修生も加わっている。この会は、日本大使館支援のもとに日本語読解試験も実施しており、昨年は 600 人もの受験者がいた。日本語の上手な旅行ガイドにはよく出会うが、日本に留学できている人は少ない。本年 11 月初めには MAJA が中心となって ASCOJA (ASEAN Council of Japan Alumni) がヤンゴンで開催される。ASEAN から 150 人の出席者が予定されており、日本からは福田前首相も出席予定と聞く。この会では私が基調講演 "Bridging Japan and ASEAN through Better Education" を行う予定になっている。

ミャンマー乾期に相当する 12 月、1 月は観光シーズンであると共に学会シーズンでもある。ミャンマー・リサーチ・コンGRESS もこの時期に開催される。岡山大学からはこれまでに榎野博史教授、小出典男教授、許南浩教授、谷本光音教授、栗屋剛教授、木俣敬裕教授、池田和眞講師、本郷淳司講師などが特別講演、シンポジウムなどで講演を行いミャンマーの医学会に我が国の最新情報などを伝えてきた。来春も小出教授を中心に岡山大学の研究者が参加する計画を立てている。

NPO 理事の下野國夫博士は以前より発展途上国の医療に関心が深く、マラリア診断のための顕微鏡などを寄贈してこられた。約 5 年前から、貧困地域に診療所を提供したいと、ミャンマー保健省と折衝していたが、2007 年に認可を得ることができた。ヤンゴン北西部のライン・タヤ地区（人口 12 万人）に「下野クリニック」が竣工したのは 2008 年の 3 月である。地区の医療中心として活用されている。

サイクロン「ナルギス」の襲来と復興支援

2008 年 5 月 2 日から 3 日にかけて、ミャンマー南部のデルタ地帯に上陸したサイクロン「ナルギス」は強風と共に旧首都ヤンゴン近くまで水没させ、死者・行方不明者 14 万人という大被害をもたらした。被害の甚大さに驚き、私たちも直ちに支援に立ち上がった。岡山駅前での募金活動は、丁度 AMDA の方たちの高島屋の前で活動と同じ時間帯であったことも思い出す。いろいろな会社・事業所、病院に義捐金箱を置かせて頂き、会員にも呼びかけた。医療関係では福山の医師会が動いてくださり多くの病院の協力を得た。ロータリークラブ、婦人団体、加計学園の同窓会などからも寄付を頂き、そ



完成した下野クリニックと贈呈式（下野博士と筆者（中央右と左）

の結果、約 450 万円の義捐金を集めることができ、皆様から寄せられた支援物資と共に 7 月と 9 月の 2 回に分けて届けた。

被害のもっともひどかった地域は標高 5 メートル以下の広大な河口デルタ沼地で、村落は縦横に走る水路を伝ってきた 7 メートルに及ぶ高潮（現地ボランティアが撮影した高い椰子の木に付着している汚れの高さから推定）と暴風雨によって完全に流されてしまったのである。陸路からのアクセスは不可能、水路でも小さなボートしか近づけず、現地ボランティアでもたどり着くのに 24 時間かかったという。インフラはまったく無く、村が有った筈の場所も流失してしまっている状況では、失われた人命、必要な支援物資などについての状況把握もままならぬ有様であったという。最初に小舟で何時間もかけて被災中心地にたどり着いた人の話によれば、このような泥地に人、動物の屍体が累々としていたという。ともかく、私たちはカウンターパートと連絡を取り合うことにより、必要なものを必要な時期に届けることができた。日頃の付き合いのお陰であると感じた。

私たちの義捐金は、流失した診療所の新築に使われることになり、昨年 9 月の訪問時にその場所まで赴き、本年 2 月の訪問時には建築中の現場を見ることができた。5 月には完成する予定である。平行して、西山理事がクリニックを提供することを申し出でられたので、折衝の結果別のクリニック流失地に新に建築が許可された。これも、今年 9 月までには「あかねクリニック」として完成の予定である。



被災地の子供たち

細胞診研修と子宮癌検診センターの設立、パピローマウイルス遺伝子解析

ミャンマーにおける女性の癌死のトップは子宮癌と乳癌である。子宮癌検診制度は確立していなかった。パパニコロ染色の読める病理医が育っていないことも判明した。そのためこれまでに延べ 5 名の病理医の細胞診の診断研修を行った。多くの医師、細胞診技師の方の協力を得たが、細胞診研修では岡大病院病理部（柳井広之准教授、大森昌子先生）、倉敷芸術科学大学内加計細胞学研究センター（大野英治教授）、岡山済生会病院（浜家一雄先生、能勢聡一郎部長）岡山協立病院（豊田博部長）には特にお世話になった。

念願の「子宮癌検診センター」はヤンゴン地区（国立医学研究局内、ム・ム・シュエ医師）とネイ・ピ・ドウ地区（総合病院内、ヌ・ワー・ミン医師）において平成 21 年開所式をおこなった。産科・婦人科学の本郷淳司講師には開設までに多大な協力を得た。センターの責任者は岡山で研修を終えた医師である。ヤンゴンセンターでは「海を越える看護団」の河野朋子看護師・助産師がボランティアで業務に参加されている。診断困難例について日本の指導医と症例検討を可能にするために顕微鏡撮影装置を両センターに寄贈する予定である。

今後、パピローマウイルスワクチンを普及させる必要があるが、その基礎データとしてのこの国におけるウイルス遺伝子の解析も重要である。総合内科特別研



救援物資贈呈と子宮癌検診センター開所式（上）センター（下）



究員原野昭雄博士を指導者として進めている。

慢性肝炎、肝炎治療センターと除鉄療法

前回の報告で、C型肝炎のスクリーニング、輸血血液の売血禁止と献血グループの設立という革命的な出来事に私達が貢献したことを述べたが、スクリーニングにより多くのC型肝炎ウイルス保因者、慢性肝炎患者が発見された。高額インターフェロン治療はこの国では論外であることより、私の関係する鉄バイオサイエンス学会で推進してきた除鉄療法（瀉血療法）を紹介した。これはインターフェロン無効例に対しても慢性肝炎進行を抑えることに成功している日本発の代替療法であり、昨年より日本でも保健適応となっている治療法である。この治療は、医学研究局の肝炎治療センターで行っており、エイ・エイ・ルイン医師（小出教授、真治紀之元講師の下で学位を授与され、一昨年帰国）が責任者となっている。B型慢性肝炎に対しても効果が見られるようであり、更に進める予定である。治療センターには小出教授の骨折りにより今年、超音波診断装置が寄贈されている。

サラセミアの遺伝子解析、HLA タイピング、血液病

サラセミアは日本では殆ど見られないが、マラリア蔓延地域に非常に多い疾患である。この遺伝子解析は原野博士の指導をうけて、多くの論文を発表してきた。指導を受けたネ・ウイン博士は現在ミャンマー国立健康研究所の理事となり活躍している。

また、遺伝子解析については、これまで手をつけられていなかったHLAタイピングに及んでおり、その為の研修生も留学している。これには京都のNPO法人HLA研究所（佐治博夫所長）の支援を受けている。

白血病治療に関する研修は、血液内科（谷本光音教授）、総合内科（池田和真講師）、小児科（保健学科小田慈教授）の協力を得た。帰国研修生エイ・エイ・ジは若手血液専門家として大活躍している。長崎大学で行った血液病研修生一名の支援もおこなった。

感染症対策等に対する支援

ミャンマーにおいてはご承知のように感染症が依然として猛威をふるっている。根本的には社会のインフラストラクチャーが整備されなければ解決されない問題であるが、医学的にも興味ある内容が残されている。分子細菌学（小熊恵二教授、保健学科横田憲治准教授）では主としてピロリ菌、下痢症の研修を指導していただいた。心臓病、腎臓病なども先進国とは異なり、溶連菌感染症の二次症としての心臓弁膜症、腎炎が多い。これには循環器超音波読影（大江透名誉教授、赤木禎治准教授）、腎臓病診断（榎野博史教授、杉山斎教授、前島洋平講師）で研修を行った。

CT、MRIなどの最新機器も導入されているようであるが、その操作、読影は必要とされるレベルに達していない。関係者からの強い要望をうけて岡大病院放射線科（金澤右教授）で既に2名が研修を受けミャンマーでは指導者として活躍している。今秋1名の研修が予定されている。

おわりに

私たちは岡山に拠点をおいて人材育成を受け持ち、ミャンマーと将来にわたる人的交流を継続しようと考えている。時代の波に流されないためにも、交流には歴史的感覚を基盤とした日本とのつながりについての信念が必要であると考えている。植民地政策として教育も技術も財産も残さず、民族間の憎しみだけを残し

て出ていった旧宗主国のやり方を他山の石として、共に助け合って生存してゆくアジア諸国とそこに住む住民の力にすこしでも貢献できればよい。私は多くのグループがそれぞれの持つ力を出し合っ様々なアジアの国と信頼で結ばれた関わりを長期にわたって持つべきだと考えている。日本にはそれだけの力があると信じている。これまでの交流を支えて下さった同窓の皆様に心から感謝申し上げますと共に今後のご支援もよろしくお願い致します。